第４１回

# 少年の主張大会

# 作文集

高浜市

高浜市教育委員会

「少年の主張大会」は今年で第４１回を迎えます。本大会を通して、これからの高浜を担う青少年の表情に触れることができ、大変うれしく思います。

日々目まぐるしく変化する現代社会において、次世代を担う子どもたちには、自分の意見をしっかり持ち、意見の異なる他者を受入れながら物事に取り組む姿が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想、さらには物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

また、私たち大人が、地域の中で子どもたちに目を向け、社会全体で子どもを育てるという意識を持つことが重要であり、本大会がそのきっかけになればと思います。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、お力添えをいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

高浜市長　　吉岡　初浩

高浜市の少年の主張大会も第４１回を迎えました。本大会での発表を通し、社会を深く見つめ、自らの体験や見聞きしたことを改めて実感し、自分の考えや希望に対して強い信念をもって現実化していこうとする青少年のたくましさを感じます。

出場者の皆さんが社会を見つめ、自身の考えを社会に向けて発表し、自分の夢や希望に向かって歩みを進めようとする姿勢は、間違いなく生きる力にあふれた次世代を築くことにつながることでしょう。

また大人である私たちも、現代を生きる子どもたちが何を求めているのか、どのような未来にしたいのかをしっかりと理解し、対話し、地域全体で子どもたちの成長を支えていく必要があるのではないでしょうか。

最後になりましたが、子どもたちの豊かな成長にお力添えをいただいている皆様に感謝申し上げますと共に、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

高浜市教育委員会
教育長　岡本　竜生

# もくじ

## 小学生の部


| | | | |
|---|---|---|---|
| ☆「早く」と言われない大人の自由 | 高浜小学校６年 | 岩戸（いわと） 大空（そら） …… | 2 |
| ☆マスクの有無は人それぞれだ | 吉浜小学校６年 | 内藤（ないとう） 瑠海（るみ） …… | 3 |
| ☆わたしのように、わたしらしく | 高取小学校６年 | 鈴木（すずき） 七海（ななみ） …… | 5 |
| ☆あいさつでつなぐ人間関係 | 港小学校６年 | 貞方（さだかた） あすか …… | 7 |
| ☆「当たり前」を変えるスタートライン | 翼小学校６年 | 岡田（おかだ） 萌衣（めい） …… | 8 |


## 中学生の部


| | | | |
|---|---|---|---|
| ☆「知る」こと | 高浜中学校３年 | 千賀（せんが） 小路（こみち） …… | 10 |
| ☆バスと気遣いと優しさと | 南中学校３年 | 柴田（しばた） 礼実（れみ） …… | 11 |


## 高校生の部


| | | | |
|---|---|---|---|
| ☆挨拶のちから | 高浜高等学校３年 | 舟橋（ふなばし） 柚（ゆず） …… | 13 |


〔敬称略〕

# 「早く」と言われない大人の自由

高浜小学校６年　岩戸　大空

なぜ大人は「早く、早く」ばかり言うのだろうか。「早く起きなさい」「早くゲーム終わりなさい」「早く宿題やりなさい」「早く片付けなさい」「早くお風呂に入りなさい」「早くねなさい」ぼくの周りには「早く、早く」があふれている。そんなに「早く」が大事なのか。ぼくだってちゃんと時計を見ているし、先のことも考えている。たまに、友達とゲームをやりすぎたり、ユーチューブを見続けていたりして「もうこんな時間？」とおどろいたことがあるけれども、それでもそんなふうになることはめったにない。ぼくは自分のペースを大事にしているのだ。それを分かってほしいと思う。だいたい、大人は「早く」を大事にする割に行動がともなっていないことがある。先日も出かける時間を決めたのに、両親の支度がおくれたことがあった。ぼくが「早く、早く」とせがむと、「ごめんと言ったでしょ。」などとおこられてしまったのだ。子どものぼくは言いたいことをぐっとこらえて、頭の中で、大人って、なんて理不尽なんだと考えながらあらしが去るのを待っているしかない。ぼくの方が百倍多く母から「早く」と言われているにもかかわらず、だ。やっぱり理不尽だ。大人が一方的に理不尽なことを言うのは間ちがっている。絶対におかしい。ぼくはそんな大人になりたくない。早く大人になって、「早く、早く」と言われずに自由になりたい。

しかし、どうやったら大人になれるのか。十八才で成人だから、自動的に大人になるのか。もし、知らないうちに大人になるのなら不安になる。なぜなら、大人にはできて、子どものぼくにはできないことがいっぱいあるからだ。例えば仕事をしてお金をかせぐこと。他にも車の運転、洗たく、そうじ、料理。まだまだいっぱいあると思うけれど、あと六年で全部できるようになるとは思えない。中学校、高校へ進学したら、勉強ももっと大変になりそうだ。友達と遊んだり、野球をもっとやったり、やりたいことがたくさんある。これからもやりたいことが増えていくと思う。大人になるための準備もしていかないといけないのか。何をすればいいのかまったく想像できない。

ある日の夕方、ぼくは家庭科の調理実習で作ったことがある野菜サラダを家で作った。しかし、ジャガイモのゆで加減を間ちがえてしまい、固い部分が残ってしまった。母と失敗したサラダを食べているときに、

「ねえ、ぼくはどうすれば大人になれるの。ママはどうやって大人

になったの。」と、思わず聞いていた。すると母は、「体はね、よく食べて、よくねていたら年とともに大人の体になるよ。でも、大変なのは中身。全部一人で決めたり、行動したりしないといけないことが増えるの。しかも、その全部に責任がついてくるからね。そこが大変だよね。でも、だいじょうぶ。最初から全部できる人なんていないから。」と、ぼくの目を見てゆっくりと話してくれた。さらに母は、「みんないろんな間ちがいや失敗をして覚えていくの。ママが今までにいろんな失敗をしているのを見て知っているでしょ。大人だっていろいろ大変なんだから。だから、大人になるって、いろんなことにチャレンジした経験の積み重ねなのかもね。」と話してくれた。大人は何でも自由にできるし、勉強しなくてもいいと思っていたけれども、母の話を聞いてたら、思ったよりも大変そうだ。責任がついてくると考えたら不安だから、まだ子どものままでいいとさえ思えてしまう。でもその一方で、いろんなことにチャレンジして経験を積んでみたいと思う自分もいることに気づいた。その日から、仕事から帰ってくる母を手伝うために、一人でごはんを作る日を増やしたり、時には買い物をしたりして、チャレンジを増やした。そんなぼくを見た母は、

「これで大人になっても安心だね。」

とほめてくれた。ぼくは照れてしまったけれども、自分にもできるんだという自信がついて、とてもうれしくなった。

　両親が「早く、早く」って言うのは、だらだらしていると時間がもったいないと考えていたからなのかもしれない。時間を有効に使って、たくさんの経験を積んだ方がよいと思っての一言だったかもしれない。ぼくが、母の年れいに近づいたとき、子ども時代の気持ちを忘れない大人になりたい。そして、母のように自分の行動に責任をきちんととれる大人になりたい。

# マスクの有無は人それぞれだ

吉浜小学校６年　内藤　瑠海

　みなさんは普段からマスクを着けていますか。私は学校で毎日マスクを着けて生活しています。マスクは風邪やコロナ対策のためにつける物ですが、最近では、コロナが収まり始め、マスクをしない人も増えてきました。でも、私はマスクを外そうと思ったことはありません。みなさんは、マスクの着用についてどう思いますか。

私が二年生になった年からコロナ対策をした学校生活が始まりました。学校にいる全員がマスクを着け、すぐにマスク姿が当たり前になりました。コロナが落ち着き始めたころ、マスクを外す友達が少しずつ出てきました。先生も、
「外しても大丈夫だよ。」
と言っていました。しかし、私は外すことができませんでした。なぜなら、友達に素顔を見られたくなかったからです。自分の口元や鼻を見られることが恥ずかしいと思うようになっていました。

私は学校とは違い、家ではマスクを外しています。そこで、自分の行動を疑問に思いました。なぜ家族の前ではマスクを外すことができて、学校では外せないのだろうか。よく考えてみると、いくつかの原因があると思います。

一つ目は、安心感です。学校の友達よりも家族の方が長い時間を一緒に過ごしてきました。だからどんな姿でも見せられる安心感があります。

二つ目は、人の目を気にするかどうかです。学校でマスクをせずにくしゃみや咳をすると、みんなから見られてしまいます。私は、軽く咳き込むだけでも周りが気になります。私の学級では、ほとんどの人がマスクを着けて生活をしているので、あまり気にしませんが、給食などのマスクを外す時間は気になってしまいます。また、マスクを外すことで自分のコンプレックスについて陰で何か言われるのではないかとも考えてしまいます。

マスクを着けることによるデメリットも二つあります。まず、暑い中マスクを着けていると、熱中症になる可能性があることです。この理由は分かります。外した方がいいと思います。もう一つは、もし周りが外し始めても自分だけマスクを着けていたら、学級の中で浮いてしまうのではないかということです。私の家族もみんなが外しているから自分も外そう、と考えていました。

私には中学生の兄がいます。兄はマスクを外して学校生活を送っています。これまで隠してきた自分の素顔を友達に見せることが、兄は恥ずかしくないのかと疑問に思ったため、質問してみました。すると兄は、
「学級の友達が外しているから外す。」
と言っていたのです。さきほども話したように、私は自分の素顔を見られるのが恥ずかしいので、マスクを外したくないと考えています。でも、みんなと違う自分というのも嫌です。もし周りの友達がどんどんマスクを外していって、自分のようなマスクをしている子が少なくなってしまったら、私はどうするだろうか。いつまでもマスクを着けていることで、何か言われてしまうかもしれません。みんなと違っても大丈夫と、どうやったら思えるのだろうかと悩んでしまいました。

多くの人はマスクの有無についてどのように考えているのかイン

ターネットで調べました。すると、個人の判断で着けるか着けないかを決めるべきだと出てきました。それなら私は、素顔を見られたくないから外さなくてもいいじゃないかと安心しました。家族にも相談してみました。私の弟は、
「勇気を出してマスクを外した。」
と言っていました。誰でも、勇気を振り絞る時があるのだと思いました。また、母も、
「自分の好きにやるといいよ。」
と言ってくれました。家族と話すことで、ずっと悩んでいたことが少しずつ楽になりました。

これから私は、周りの意見や行動に流されずに、自分の意志で何事も決めていこうと思います。だから私は、今はマスクを外しません。まだまだ周りの顔色を伺うこともあると思います。だけど、自分が一番気持ち良く過ごせる姿でいたいからです。自分だけでなく、人はそれぞれの考えで行動していることを忘れずにいたいと思っています。

# わたしのように、わたしらしく

高取小学校６年　　鈴木　七海

「何に出会い、何を学べるかが楽しみだな。」

わたしが、こう思うのは、成功に近づける方法を見つけたからです。

その方法とは、失敗を経験することです。みなさんは失敗したことがありますか。成功に近づくためには、少し落ちこむこともあるけれど、失敗を経験することが大切です。わたしの二つの経験を話します。

以前、わたしには苦手な子がいました。その人のいやなところを友達に言っては、その子を悪者に見立てていました。わたしが思っていることが正しく感じられて、とても気分がよかったです。ある日、いやなところを言い続けていると、その子本人に伝わってしまいました。でも、最初は、知られたくらいでは何とも思わず、むしろ、相手も自分のことをいやだと思ってくれて都合がいいと思っていました。しかし、時間が経つにつれ、私は少しずつ周りからさけられたり、相手にされなくなったりしました。当然、その人からも名前で呼ばれることはありませんでした。きらわれてもいいやと思

っていたけれど、実際にきらわれるのは、さみしかったしつらかったです。それでやっと、自分がしていたことがまちがっていることに気付きました。自分の思っていることをすべてだれかに聞かせてすっきりしていても、相手からしたらいやでいやでたまらないだろうということに気づきました。だれかをいやな気持ちにさせるかもしれない、そう思い始めてから、わたしは人のいやなところを友達に言わなくなりました。

正直にすごいな、おもしろいなと思ったことは相手に伝え、何かしてもらったら「ありがとう」と伝えるように心がけていました。できるだけ人にやさしくすごしていたら、男女関係なく話せる相手が増えました。今では、毎日友達の家に遊びにいくようにもなりました。うれしいような楽しいような、今まで感じなかった初めての感覚を感じることができました。

二つ目は、去年、習い事で習っているダンスをやめたことです。理由は、全然練習をしていなかったからです。保育園の年長のころからやっていて、ただの遊びや体力づくりのためだと思っていました。もともと体力のないわたしからしたら、基本のステップをずっと続けることすらつらく、他の子に追いつけなくなりました。うまくできないと全体の練習が止まって、周りから笑われているようにも感じました。

でも、それはただの言いわけでした。あらためて見ると、周りの子たちは、ダンスを毎日欠かさず練習をしていて、努力をしていて、この数年をダンスにかけているような子たちでした。わたしには、ダンスにすべてをかけるような気持ちはありませんでした。親が準備してくれた発表会の衣装だってそう安くはありません。みんなのがんばりと親のありがたみに気付いたのはダンスをやめてからでした。一緒に練習してくれた周りの子や親の期待を裏切ってしまったと思いました。

それからは、もうだれの期待を裏切らないよう、何事にも努力しました。学校の勉強の量を少し増やしたり、時間があればだれかを楽しませたりしました。自分がすきなことには、今まで以上に全力で取り組みました。自分のペースで自分なりに努力することが楽しいと感じるようになりました。あのとき、ダンスをやめてしまったのは、今思うと少しさみしいけれど、ダンスの技術はまだ残っています。自分なりの努力の仕方や楽しさを見つけることができました。

失敗をしたことがない人なんていないと思うし、わたしはこれからもきっと数え切れないほどの失敗をすると思います。でも、それは自分で自分のことを考えるきっかけをくれる大切な出会いだと思います。これからの出会いも楽しんでいきたいです、わたしのようにわたしらしく。

# あいさつでつなぐ人間関係

港小学校６年　　貞方　あすか

みなさんは、自分からあいさつができますか。また、友達はあいさつをしてくれますか。

私が、あいさつを自分から言えたのは、３年生のころでした。１年生のころ、自分からあいさつができませんでした。なぜなら、あいさつをしたときに無視をされた経験があるからです。それ以来、無視されるのが怖くて、自分からあいさつができませんでした。そして、いつの間にか、「おはよう」とあいさつすることができなくなってしまいました。

その頃、「おやすみ」「いただきます」を言わないと気が済まない性格だったのに、あいさつは「してはいけないんだ」とか、「友達にあいさつしたら嫌われちゃうんだ」と思っていました。だから、なんだか心がずっともやもやしていました。

私の友達が「おはよう」とあいさつをしてくれました。私はとってもうれしかったのに、「友達にあいさつすると嫌われちゃう」と思ってあいさつを返すことができませんでした。友達が、

「なんであいさつしてくれないの。」

と悲しげに言って、どこかへ行ってしまいました。それを見て私は、やっぱりあいさつはしないといけないと思いました。あいさつ一つで人間関係は変わってしまうのかもしれないと思いました。

「このままじゃ、どんどん友達が減って、もしかしたらひとりぼっちになるんじゃないかな」私はそんな思いになって、決意しました。「明日からは、勇気を出してあいさつをしよう」と。

そして今、私は自分からあいさつを学校でできるようになりました。自分からあいさつをしないと気が済まなくて、友達にあいさつをしています。振り返ると、なんであのとき、自分からあいさつをしなかったのだろう。あいさつをすれば、みんなが笑顔になれるのにと思います。

私は学校の委員会活動で生活委員長になりました。生活委員は学校生活がよりよくなり、みんなが気持ちよく生活できるように考えて活動する委員会です。私は、港小学校のみんなが大きな声ではずかしがらずに自分からあいさつができたらいいなと思います。学年関係なく、だれにでも明るいあいさつができたらもっとすてきな学校になると思います。ですから、委員会の活動で「あいさつキャンペーン」を全校みんなで取り組みたいです。すてきなあいさつを放送で紹介してあいさつの輪を広げていきたいです。

あいさつはみんなが笑顔になったり心が晴れたりします。まるで

魔法の言葉です。私はあいさつを大切にします。みなさんにもあいさつを大切にしてほしいです。

みなさんがあいさつをすれば、お互いの気持ちも分かるし、あいさつをされたらうれしくて「もっと、みなさんにこの幸せを分けたい」と心が広くなります。心が広くなれば争いごとは起こらないし平和になります。戦争だって起こらないと思います。

あいさつは人の心を癒やします。そして、友達との関係が深まると思います。あいさつをされたり、あいさつをしたりしたら、きっと心が温かくなるでしょう。これからも、あいさつでよい人間関係をみんなで作っていきましょう。

## 「当たり前」を変えるスタートライン

翼小学校６年　岡田　萌衣

そのとき、私は友達がつぶやいていた、ＳＤＧｓという言葉について調べていました。ＳＤＧｓとは、サスティナブル、ディベロップメントゴールズ。日本語では、持続可能な開発目標と訳されます。

その中で、一番はじめに私の目に入ったのは、目標の６番。そこには「安全な水とトイレを世界中に」、と書かれていました。「えっ」・・・私は声をあげておどろいてしまいました。どうして生まれてからこれまで、生活していて水やトイレのことで不便だと思ったことはありません。水はじゃ口をひねれば出てくるし、きれいなトイレはそこら中にあります。気になって調べていると、難民キャンプで水不足が生じているというＣＭを見ました。ある難民キャンプでは、一日に水が１８リットルしか使えないそうです。一方、日本では、お風呂やトイレ、料理や飲み水などで一人当たり約２００リットルの水を使っているそうです。国がちがうというだけで、こんなにも差があるんだと私はおどろき、ショックを受けました。私は日本に生まれて、水は好きなだけ使えると思っていました。それに清潔なトイレもたくさんあります。けれど、他の国では戦争をし、生活が不便で、今、この時も、１てきの水も飲めないくらい大変な生活をしている人がいます。

私は、今のこの生活が、当たり前ではないことを知ったのです。たった一ぱいの水を飲むために、遠い川まで水をくみに行き、たくさんの努力や苦労を、毎日している人たちがいます。そして、そのたった一ぱいの飲み水でさえ、清潔な水ではないのです。日本で生

活をしている私には、川の水をそのまま飲むことにはていこうがあります。でも、その人たちは飲まなければ生きていけないのです。同じ地球で生きているのに、ものすごく大きなちがいです。

日本で、なぜ水が簡単に手に入るのか、気になったので調べてみました。日本は地形の関係で世界平均の二倍ほど降水量が多いそうです。それだけではなく、日本には雨水をため、きれいにしてくれるじょう水し設や下水道設備があります。そこで働く人たちのおかげできれいな水を安心して飲めているのです。一方で雨が降らず、その施設すら作れない国がこの世界にはあります。水道水が安全に飲める国は、たった十二か国しかないということを私は初めて知りました。その数字は思っていたより、とても少ないです。よごれた水を飲めば、げりや激しいおうとにおそわれる可能性があります。そのリスクが小さな子からお年寄りまで毎日ともなうのです。

トイレも「当たり前」に全ての国が使えず、トイレ自体がない国があり、あったとしても水が流れない国もあるそうです。このような環境では、不衛生で病気になる人が増えてしまうでしょう。今も、世界で約三人に一人が安全にトイレを使用できていないそうです。不衛生なトイレや水が原因で病気になってしまう人が一日に約８００人もいるそうです。

日本にいる私たちは、きれいな水や清潔なトイレがあり、不便だと感じることがなく、これまで安心して水が使える理由を考えることもしませんでした。しかし、他の国ではきれいな水が十分に使えず、そのことで苦しんでいる人がこんなにもたくさんいることを知りました。少しでも多くの人が平等にトイレや水が使えるようにするにはどうすればよいのでしょうか。

それは、私たち一人一人が意識して、私と同じように「知ること」から始まるのではないでしょうか。「知ること」こそ、たくさんの人が安全で健康に生活するための、当たり前を変えるスタートラインなのではないかと私は思います。

そして、そのスタートラインに立った私は、次に「知らせること」をがんばりたいと思います。今日、私はこの場でみなさんに私の思いを知らせることができました。７月には学校集会で翼小学校のみんなに、知らせたいと思います。そして、私のようにたくさんの人が世界の問題を知り、知らない人に知らせていけば、きっと問題は少しずつ解決に向かっていくと思います。ぜひみなさんも、スタートラインに立ってみてください。ご協力よろしくお願いします。

# 「知る」こと

高浜中学校３年　　千賀　小路

最近、よく聞く「ジェンダーレス」という言葉。色々なところで取り上げられていて、耳にしたことがある人も、多いのではないでしょうか。これは、男女の文化的、社会的な差をなくしていこうとする考え方のことです。

私の学校では、今年から、名簿が男女混合になり、来年から、制服が選択制になります。ジェンダーレスについて、授業で少し学んだくらいで、あまり関心がなかった私は、このことを気に留めず、みんなもそうだろうと思っていました。しかし、そんな私に転機が訪れました。

ある休み時間の時のことです。友達が言いました。

「最近、「男の子らしい」、「女の子らしい」とかあまり使わない方がいいって言うじゃん？でも、それが原因で、回りくどくて、わかりにくい言葉しか見つからないのってモヤってするよね。」

これを聞いて、私は驚きました。ジェンダーレスに無関心な私と真逆で、友達は、日常で使う言葉について考えるほどジェンダーレスに意識を向けていたのです。そんな友達に対し「すごいなあ」と感心するのと同時に、自分の無関心さを恥ずかしく思いました。

その日帰宅した私は、インターネットで「ジェンダーレス」について調べていました。調べていくと、一つのサイトが目に留まりました。そこには

「最近は、「ジェンダーレス」と言う言葉に縛られすぎている人が多い。元々は、男と女は生物上違う生き物であって、個人差はあるが、脳のつくり、筋肉量などが違ってくる。だから、時には、それぞれにあったことをするのも大切だ。」

とありました。

すごく納得する反面、違和感も少し覚えました。男性は筋肉が多く、重いものを持てることは知っています。女性は母乳が出て赤ちゃんに与えられることも知っています。故に、男性が重いものを持つ、女性は家事をやるのが当たり前という文化が生まれたのかも知れません。しかし、生物学的な特徴だけで考えるとやはり、差別が生まれかねないと思いました。

逆に最近は男でも家事をするべきだと言われています。しかし時代だからやれというのにも違和感がありました。この違和感はなんだろうと考えた時、先日、母に叱られたことを思い出しました。

ある日、私は母と弟と一緒に買い物に出かけました。たくさんの荷物を載せて帰宅しましたが、私と弟は、手ぶらで家に入りました。母は車から玄関を何度も往復して、荷物を運んでいたので、私たちに手伝うよう頼んできました。でも、私たちは、遊びたかったので、

「えー。無理。」

と言いました。すると母は、

「何も難しいことは頼んでいないよ。難しいことができなくても怒らないけど、できることをしないのは怒るよ。」

と言ったのです。

母は、男で筋力があるから持て、女が家事をすべきだから持てという意味で怒ったのではありません。そして、男が家事をする時代だから持てというわけでも、男女平等だから女が持てという意味でもありません。母は、困っている人がいて、助けられる人がいるのに、それを助けようとしない「心の在り方」に怒ったのです。「男だから」「女だから」ではなく、できる人がやる。このエピソードを思い出したときに、私の違和感に対する答えが出たような気がしました。

私は、男だとか女だとかいう大きなくくりをする前に、相手をよく知り、思いやるということが性差別をなくすことにつながるのではないかと考えました。思いやりという言葉を使うのは簡単ですが、思いやるためには、相手の状況や気持ちなど、目に見えない背景を読み取る力がないとなかなかできません。自分にはない感覚や価値観を知らなくてはなりません。無関心で無知なことは、人を傷つけかねないということにも気づきました。私は、これから多くの人と出会い、丁寧に向き合って相手を「知る」という経験を積み、差別のない社会づくりをしていこうと思いました。

# バスと気遣いと優しさと

南中学校３年　　柴田　礼実

今までの私は、優しさを大げさに捉えているところがありました。私のイメージする優しい人は、周りの変化にすぐ気が付き、話を聞いてあげられる人。あるいは、困っている人がいたら放っておけず、自分のことのように考えてくれる、そんな人でした。ですが先日、私の中で優しさに対する見方が大きく変わる出来事がありました。

それは、私が路線バスに乗ったときのことです。その日は休日で、お客さんが次々とバスに乗り込んできました。こんなに多くの人が乗れるのかなと、窓から列を眺めていると、最後尾に杖をついた足の不自由なおじいさんがいました。そのおじいさんが、バスに乗る番になると、今まで座っていた運転手さんが立ち上がり、おじいさんの乗車を手助けしていました。バスへ乗り込むには大きな段差があって、おじいさんを助けるのは当たり前のように思います。しかし、おじいさんに助けが必要なことを理解し、すぐに動いた運転手さんは、周りをよく見ていて気遣いのできる素敵な人だなと思いました。それに、車内は満員でほとんど身動きがとれないにも関わらず、おじいさんに席を譲っている人もいました。あるバス停で、おじいさんだけが降りました。おじいさんが乗り降りするには人よりも時間がかかります。けれど、おじいさんを急かすような人は、一人もいませんでした。おじいさんはバスを降りた後、お辞儀をして、

「ありがとう。」

と言ってから、ゆっくりと歩いて行きました。私は見ていることしかできなかったけれど、とても心が温まりました。ふと、周りを見てみると、子供を席に座らせて自分は立っているお母さん。揺れる車内で奥さんがバランスを崩さないように支える旦那さん。バスの中は穏やかな空気に包まれていました。その瞬間、私ははっとしました。優しさは、私が思うほど仰々しいものではないのではないか、と考えるようになりました。日常の中にあるささやかな気遣いが、れっきとした優しさだったのだと思いました。そして、私がいつも当たり前のように受け取っていた周りの行動も、優しさだったことに気が付きました。例えば、物を落としたときに拾ってくれたことや、転びそうになったときに「大丈夫？」と声をかけてくれたこと。私の周りは優しい人たちと彼らの優しさであふれていたのだと思いました。

しかし、普段の生活では優しさをもてないときもあると思います。私も、テスト週間中、勉強して休憩しているときに、母に「手伝って。」と言われると、ついきつい言葉で「わかった。」と、返してし

まうことがあります。あとから、言い過ぎたことを反省して振り返ってみると、焦りや不安で自分のことばかりになっているときに、きつい言葉を使ってしまうことが多いとわかりました。そんなときでも、思ったことをすぐに口に出さず、一度考え直すことが、相手への気遣いになると思いました。私は自分の言動にあとから後悔することが多いので、相手も自分もいやな気持ちになる前に配慮することは大切だと考えました。

これらの気付きから、私は人に優しくすることを心に留めて生活しています。なぜなら、人に優しくしてもらえるとお互いによい気持ちになると気付いたからです。優しくした方もされた方も「ありがとう。」という、たった一言で心が温かくなります。取るに足らないことかもしれませんが、少し幸せな気分になれるのです。心に余裕がないときも、相手の立場になって考えてみることで、人に優しく接することができます。これからは、私の周りにいる優しい人たちを見習って、暮らしの中でささやかな優しさから、行動に移していけたらいいなと思います。そして、いつか誰かのために迷わず手を差し伸べられる、そんな優しくてかっこいい人になりたいです。

# ***挨拶のちから***

愛知県立高浜高等学校３年　舟橋　柚

皆さんは毎日誰かに挨拶をしていますか。私は友達や先生に毎日欠かさず挨拶をしています。しかし、実は私は高校に入学するまでは人見知りで挨拶もしっかりとできないような大人しい性格でした。小中学校は同じ地域に住んでいる人たちしかいませんが、高校ではさまざまな市町から人がやってきます。高校に入学したときは、案の定知らない人ばかりで胸が苦しくなるほど緊張していました。そんな中、同じクラスのある男の子が遅刻ギリギリで教室に飛び込んできました。彼は息を切らしながら初対面の私にこう話しかけてきました。「おはよう。お兄ちゃんの準備が遅くて遅刻しそうになっちゃった。」当然のように私は何も答えられずにいました。せっかく彼が私に挨拶をして話をするきっかけを作ってくれたのに何もできなかった私は後悔していました。しかし、彼はいつも積極的で翌日も挨拶をして声をかけてくれました。私も少しずつ挨拶することができるようになり、次第に自然に話をすることができるようになりました。

部活動を決める際にも、彼は「一緒にハンドボールしない？」と聞いてきてくれました。押しの弱い私は、まるで太陽のように明るい彼と一緒にハンドボール部に入ることになりました。これが私のこれまでの人生を180度変えることになりました。ハンドボール部は部活動見学の時から元気な挨拶が飛び交い、私には不似合いな場所に思われました。しかし、自分も先輩方と同じように挨拶をしてみると、「大きな声であいさつするだけでこんなに気持ちが良いんだ。」と思うようになりました。そして、「きついな、やめたいな」と弱気な思考をしていた私は、次第に部活も挨拶も楽しく感じることができるようになりました。それからは、自分から先生や友人に挨拶をするようになり、そのおかげで気持ちのいい一日を過ごすことができるようになりました。

このように私は学校生活の中で大きな学びを得て、自分自身を変えることもできました。この経験を通して、私は「挨拶」が学校生活に留まらず、社会の中においても重要なツールになり得ると思うようになりました。

数年前に突然世界中で新型コロナウイルスが蔓延し、地域で行われていたイベントなどがすべてなくなってしまいました。それにより当たり前にあった人と人との出会いやコミュニケーションの機会も失われてしまいました。その一方で「個人」で過ごす時間が増えました。一人で過ごす時間は周りに気を遣わずに済むので「楽」です。リモートワークなど「一人」で仕事ができると効率性が上がったという話も聞きます。しかし、私はこのような状況は「楽」かもしれないけど「楽」しくはないと思います。私が自分自身を変えることができたような、新しい出会いやチャンスもなくなってしまうからです。実際、私自身も新型コロナウイルス感染予防による長期休校時は友人などと会う機会も少なく、苦しい日々を過ごしましたが、新型コロナウイルスが五類に引き下げられ、おまんと祭りのような地域のイベントが復活すると、人と人が出会う機会が増え、街そのものも活気が出てきたように感じます。やはり、人には出会いが必要で、その時のコミュニケーションの最初は「挨拶」になるのです。顔を合わせて人を笑顔にさせる、自分の人生が変わるきっかけにもなる、人を「楽しい」と思わせることができる「挨拶」が今の日本の社会に一番必要なものではないかと思います。

私は今年で18歳となり、世の中では「大人」と呼ばれる立場になります。そして高校を卒業後はこの地域で社会人として働くことを考えています。これから先、私は大人として、社会人として、自分が暮らす街がより活性化するように、そして、かつて友人の「挨拶」をきっかけに自分自身を変えることができたように、今度は私が誰かの人生を変えることができるように、「挨拶」を大事にして生きていきたいと考えています。

## あとがき

この冊子は、各校から送られてきた少年の主張作文原稿をもとに作成しました。大会の開催に向けてご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

発　行　　令和6年6月

発行者　　高浜市青木町四丁目1番地2

高浜市・高浜市教育委員会

# 人と想いが
# つなぐつながるしあわせなまち
# 大家族たかはま